氏　　名	坂本　考弘
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第５９７号
学位授与年月日	令和４年３月１８日
審　査　委　員	主査　教授　　織田　禎二
	副査　教授　　門田　球一
	副査　教授　　林　健太郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

心不全患者において静脈圧上昇による臓器うっ血を評価することは重要であり、特に治療後の臓器残存うっ血は予後に影響する。肝臓をはじめ臓器のうっ血評価が試みられているが、これまで心不全患者に対して胆嚢壁厚を計測し臓器うっ血を評価した報告はない。申請者は、心不全患者において胆嚢壁厚が心不全の重症度と関連するとの仮定のもとに、胆嚢壁厚と心不全の重症度や予後への影響について検討した。本前向き研究は、2018年7月から2019年6月までの間に益田赤十字病院における心不全Stage B(pre-Heart Failure; HF)、C(HF)、D(advanced HF)の患者116名と健常対照者11名を対象とした。116名のうち胆嚢壁厚の測定に影響する因子（食後、胆嚢疾患の病歴、心不全急性増悪時）を有する30人を除外し、計86人の患者において健常対照者との比較を行った。次に胆嚢壁厚と心エコー図指標、血液検査結果の関係を調べ、また心不全stageごとの胆嚢壁厚の変化を調べた。さらに心不全Stage CまたはDの患者64人に対して、胆嚢壁厚計測時から2019年8月までの期間に心不全増悪による入院をイベントとして追跡した。 結果として、86人の心不全患者は健常対照者よりも胆嚢壁厚が有意に厚く（2.0 [1.7-2.4] vs 1.3 [1.1-1.6] mm; P<0.001）、胆嚢壁厚は心不全Stageの上昇とともに段階的に増加する関係を示した(Stage B 22人: 1.8［1.7-2.1］mm、Stage C 60人: 2.0［1.8-2.5］mm、Stage D 4人: 4.0［3.5-4.5］mm)。心不全Stage CまたはDの患者64人では追跡期間中央値303日において心不全による入院が11件観察されたが、心不全による入院イベントの割合は胆嚢壁厚が薄い群(<3mm)よりも厚い群(≥3mm)で有意に高かった(P=0.007)。胆嚢壁厚計測には標準化などに今後の課題を有するが、心不全患者における臓器うっ血の評価に用いることを示した初めての研究報告であり、心不全患者における臓器うっ血の付加情報をエコーにて容易に提供できるという点で新規性・独自性を有する価値のある研究である。